

◇園長室の窓から◇

子ども本来の姿を求めて



岡田 鈴代

幼児教育は、「生活の教育化」が中心となるべきである。そのためには、幼児の内面から溢れでてくる経験や活動に、教育的なねらいをどのように調和させるべきか、また、その活動が更におもしろく楽しく発展していくようにするための手立ては、どうすればよいかを考えなくてはなりません。さらに、幼児が、常に停止することなく活動し、何かを考え、発見する姿を求めるためには、常に幼児の生活に応じたふさわしい環境の設定が必然的に要求されます。

しかし、それ以前に、私たちは、幼児らの活動にたいへんむらがあるのに気付かずにはいられません。朝食ぬきで空腹である幼

児、けいこごとのスケジュールが多すぎて疲労が残っている幼児など、家庭環境の欠陥によって、いつしか子どもらしさを失っている幼児がいます。それに加えて、登園のため送ってくる母親の中に、必ずといっていいほど、別れぎわに、「お利口さんになっているのよ」とつけ加えられて園に入る幼児、この利口にはいろいろの意味が含まれていて、びちびち遊びたくても遊びを禁止されてしまっているの、ある期間、傍観的にならざるを得ない状態が続くわけです。

こんな静かな田舎の幼稚園にまで、時代の風潮が流れて来ているのかと思うと怖い気持ちになります。そこで、入園早々に保育

参観を行ない、母親である責任と、母親としての喜びを感じる能力を見失っていないか、母性愛が涸渇していないかなどについて話し合います。そして、食事内容の大切さを再認識するために、サンプル弁当の交換会を開き、母の愛情ある食事を与えることにより、幼児は健康ばかりでなく、精神面、性格面までも健やかに育ち、人間関係の暖かみも味わうことができるという食事の価値を十分理解させるなど、まず、食足りて生き生きとした生活が生まれてくるのだということを知らせることから、幼児教育はスタートしなければならなくなりました。私たちは、このような現状から自然を大事にした肌と肌とのぶつかりあいによる教育を行なおうと考えました。

一、自然とのかかわりの中で育つもの

① 新しい発見のなかで喜び育つもの

先輩の先生方が、近くの山々から植えかえられたであろう小さな苗木が、三十年の年輪とともに茂みを増し、園庭の回りは、もみじ、松、ふじ、柿、ツツジ、桜などが四季折々に幼児たちを楽しませてくれます。そして、ここでの遊びでは、自然を友とし、図鑑の知識でない本物との出会い、自然との触れ合いが行なわれ

ます。

それでも、ゆっくりと幼児たちの遊びをみていますと、もっともっと幅広く、それらの自然を自分たちのものとして遊べないかと痛感するのです。園庭の片隈に小山があり、その回りは春になってやわらかい葉が一杯に広がっていても、そこにすわったり、素足で歩いたり、転がることすらできない幼児、「虫が背中にくからいや」「足が汚れるもの」とちゅうちょする幼児らには、目の前にある折角の自然も表面的に素通りしてしまうくらいがあると思われます。

雀のえんどうの笛つくりや、パイパイ草を口にくわえる遊びなどをしたり、教師も一緒になって転んだり、相撲をしたり、天気の良い日には、ピクニックとってお弁当の場所にするなどとしていくうちに、緑の香りも、草の青くさい味もすっかり知ることができ、いつの間にか木も草も園庭のすべてが、自分たちの遊び友だちとして広く活動しはじめるのです。

太い枝に飛びついてぶらさがりたい気持ちや、登ってみたいしぐさを見て、一番大きくて強そうな松の木に登ることを許可したその日から、靴や靴下をぬいで素足になり、木との感触に、「カサカサしている」「ぶらさがれる」と代わり合って楽しむ姿からは、はんと棒では味わえない喜びがあふれています。枝を折る

心配もなく、木の強さに幼児らは驚き、一度に登るとかわいそうだといたわりの気持ちが生まれ、たった一本の登れる木を大事にしているのです。また、新緑のはずのもみじが数本、秋でもないのに黄色くなって散りはじめたとき、根っ子のところに、カミキリ虫の幼虫がいることを知り、早速、調べるために根っ子を倒してみると、根っ子いっぱいカミキリ虫の幼虫がいるのをみつけ、「この虫が木の汁を吸って生きていたのか」と一大発見に小さな頭が集中し、じっと見つめ、「どうして、どうして、どこから入ったの」の連発、とうとう林業試験場の人から話を聞くなど、今までは教師が見すごしていた幼児の一面があったことに気づくのです。

② 観察のなかで得られるもの

限られた土地での自然を生かすため、花壇に力を入れて、いろいろな花の美しさを肌で直接感じさせてやろうと思いたちました。幸い年少組は秋に植える球根の成長過程を観察することができるので、全員で花壇の土を入れ替え、枯草、鶏ふんもうめて土を肥やすことから始め、チューリップと水仙の球根を三百個余り植えました。開花の時期までの手入れを懸命にやり大輪の出揃った美しさを十分に楽しませました。

黄色い花が二個、三個も一本の軸に咲いている不思議な現象を

みて、「双子のチューリップ」といって喜んだり、花に顔を寄せ、「大きい花の中に顔が入りそう」といって、めしべおしべを発見して驚いたり、花卉が散りはじめると、ままごとの皿に、ごちそうにと早変わりするなど、幼児たちは体を埋めんばかりに花に接しました。また、花の回りを歌まじりで駆け回るなど現に幼児たちの目に咲きほこっているチューリップや水仙を、自分たち一人一人の大好きな花として、素直にその美しさに接してくれるのです。また、野菜園は、いちご、トマト、さつまいもなどと屋外環境は年間を通して変化をしていきます。

園庭の木々が緑濃くなる頃には、幼児たちの大好きな虫取りが始まり本能的にタモを持って走り回ります。捕えた後をどうするかということは、捕えるのに夢中でそこまで気が回りませんが、カミキリ虫、セミ類、クロアゲハなどの蝶類の時期から、バッタ類の仲間の頃まで、捕えたらその日の夕方までに放してやることを約束して一匹でも死なせないようにします。

カブト虫などの甲虫類は、山の方からこられる先生に持ってきてもらって、幼虫から脱皮するまでを観察させて十分に虫のかわりを持たせるのです。生き物との心の交流が知らず知らずになされているのか、十分に虫と遊んだためか、消極的な無口な幼児が心を開いて虫に話しかける場面に会合うのです。

また、自分と同一化している四歳児は、カメの背中を石けんで洗いながら、「きれいにしてあげるの」と撫ぜたり、「先生、カエル食べたらとべるようになるの」と真剣な眼差しできくなど、自分と一体となって心情を満たしています。

このように一つの行動に真剣に取り組んだ時には、いつとはなく同一の遊びをしている友だちとの仲間意識ができ、そこには、会話があり、笑いがあり、驚きがあり、その中で知的な思考力が芽生えていくこともしばしばみられます。このように、どんな小さなことでも感動的な体験の一つ一つを大切に積み上げていき、人間関係の深まりをより濃くしていきたいものだと思います。

二、肌と肌とのぶつかりの中で育つもの

① 集団行動の中で

じりじりと照りつけた夏の太陽が沈みかけた頃よりユカカタ姿で集まってくる幼児たち、私たちはいつもと違った姿に目を細めて園庭に迎え入れました。親子全員で行なう納涼大会、父兄たちの手で一か月前から用意された檜、金魚すくい、氷かきなど数店が並び、太鼓の音が響きわたる盛り上がりしました。

連帯意識が育ち、今までは、自分の子どものことだけこそ考え

なかった父兄も、みんなの協力がなければできない一つの大きな行事に取り組んで、親も子も職員もそれぞれの自分の持ち前をフルに出し切って協力する態度が生まれました。そして、幼稚園中が一体となって、今宵楽しく体験したことが後々まで残り、人と人との交流を図ることができ、近隣愛の深まりがみられました。ある日の午後急に雨が降り出して来たとき、近所の子ども全員のかさを自転車につけて、にわか雨の中を走ってきて、各組の前で、「○○さんかさやに」とくばっている園児のおじいさんの姿をみて、自分本位の世の中ではめずらしいうれしい姿だと胸がしまったことがあります。

② 劇あそびの場面

毎月行なう誕生会に年間三回は全職員で劇やリズム表現を披露するので、昨年の二期の後半の時に、「七匹の子羊」の劇あそびを演じました。ストーリーが進むにつれて、狼が子羊を食べるシーンはかわいそうといいながらも、おもしろおかしく見ていましたのに、子羊を狼のおなかから出して、石ころを詰める場面から、幼児の目は狼に集中し、池に落ちる狼をみて、狼になった担任の幼児が、「早く助けないと狼が死んじゃう」「早く早く」と叫ぶのです。「どうして助けるの」と問いかけると、「ロープをなげて引っばるの」といったかと思うと、その組の幼児が先頭に

なつて、ヨイシヨイシと力いっぱい引っぱり上げました。自分たちから立ち上がつて、狼でない大切な先生を助けたい一心に変わり、空想と現実とが交差しながら、担任に対するやさしい心情が身についているのを思い知らされました。

平素からの教師对幼儿、对幼儿对幼儿のふれ合いの中で自然に育つ何物にも勝るものを痛感しました。

③ S児とのかかわりの中で

一年保育の二期のこと、「S君、お菓子が食べたいと思つても、お菓子ということも食べたいということもしゃべれないの、それで、あーもうーといつてゐるの、どう思う」という教師の働きかけに、「かわいそう、なんにもいえなかつたら自分のしたいこともできへんに」といろいろと思ひやりの言葉が返つてきました。以前は、「やかましい、あーあー」といつて、迷惑がついてた幼児たちも、S児が徐々にではあるが自分でする姿をみて、「あ、自分でかばん掛けた」といつて頭をなでたり、「弁当を一人で保温器に入れた、かしこい」とよい面をみとめるようにもなりました。

ある時は、グループ単位の体育活動の取り組みの中で、S児についての話し合いの時に、達成可能なことを皆で考えてやるなど、S児に対してどうしてやればよいかをみんな考えてやつた

り、その時その時でS児自身がやれることはやらせ、不可能なことは世話をしたり助けたりする幼児などもみられました。

このように、友だちに対する思ひやりの心が育つまでには、幼児对幼儿の体当たりの争いや葛藤をいろいろの場面で経験してゐます。その積み重ねの中で、友だちを大切にすることの理解も、グループで遊ぶおもしろさもみつけ出して来たように思われます。

そして、組全体、園全体がS児にそれとなくことばをかけたたりしてかかわりを持ったことにより、人間関係が成立していつたように思われます。

S児は、幼稚園生活の後半からは、園外保育にも参加できるようになりました。他の幼児とあまり変わることもなく、山を滑べり、根っ子を引っぱつて登るといつた冒険にいとむ積極的な活動や、全身で山土にいとむ姿が見られるようになり、どこに障害があるのかしらと思われる場面にも数々出会いました。

④ 四歳児に接して

このように、部分的にはあるが、園全体の年間の流れを反省してみる時、失敗の連続でひや汗の流れる思ひやら、幾度となく心地よく想い出される場面や、つらかつた場面などが交差してゐるのですが、中でも二年保育の良さが痛感されます。あせらず、

その子その子に応じた配慮をすることにより何かをみつげ出すことができるのです。自己主張の強い四歳児、幼児一人一人に対することばかけを重視し、常にほほえみと慈愛の気持ちで接する時、かれらは安定感をもって自分の遊びに没入している姿をみる事ができます。そこには、独創性に富んだ楽しい作品が生まれて感嘆したり、リズム表現の素晴らしさに共につられて仲間入りをします。ある時は、舟の船長にさせられたり、小人といも虫のお母さんになって、背中に大勢おぶさって来たりなど、すっかり幼児たちのとり子になってふらふらになる時もあります。

今まで、何となく小さく見られていた年少児も年長組になった喜びが日常の活動の中でプラスとなって現れ、時々年少組の保育室をのぞいては、やさしい思いやりのことばをかけたたり、一緒に遊んだり、ある時は、自分たちでグループをつくりルールある遊びを連日展開して満足している姿がみられました。昨年度年長児が二学期頃していた開戦ドンを、全く同じ遊び場所に進級早々の五歳児がして遊んでいる姿をみてほんとうにうれしくなりました。また体力の弱さから自信の持てなかったK児がトランプボリンの面白さを覚え、ある限界を克服した時、友だちとの会話に大きな声が出せたり、笑いがみられるなど、それぞれに成長の姿がみられるのです。また、年長組になった親が、積極的にPTAの委

員を引受けてくれたり、いろいろと自主的な協力態度がみられると、二年保育のよさを素直に感じさせられます。

三、おわりに

しかし、すべての幼児に常に満足感を与え自らの力を十分発揮させることができたろうか、心と心のつながりが持てたろうか、単なる思いつきで軽卒な教育はしなかっただろうか、知的なことばかり幼児に強いことはなかったかしらと、反省と苦悩の連続です。

自己充実のできる環境——考えれば考えるほど本来に難しいことです。自分につまずきを感じた時には、倉橋惣三著の「保育の真諦」に目を通して心の安らぎを覚えたり、指導書を読むことにより自分への示唆を求めるのです。そして、職員のチームワークをかため、父母たちとも連帯感を深めつつ幼児たちに自己を十分に発揮できる場を与え、幼児の理解の上にならって、自ら何かをやるうといった意欲を育て、自主的に行動する姿を大切にした幼稚園教育を行なっていきたいものです。

(四日市市立伯山幼稚園)